ヤンデレ少女でドン！

一期 つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ少女でドン！

【Ｎコード】

Ｎ４８１４Ｚ

【作者名】

一期　つかさ

【あらすじ】

それは突然だった！　幼馴染みのハーフでしかもオタクな変態少女、川崎ジェシカが「あんた変態女にストーキングされてるよ！」と俺に報告してきた！　その日から、ヤンデレ少女の恐怖が俺に襲いかかる！　ヤンデレ以外にも変な女の子がたくさん！　（ハーレム目指しつつヤンデレ展開目指します）。

第０話　キャラクター紹介！（前書き）

話の展開とかはあんまり気にしない方がいいです。

第0話　キャラクター紹介！

☆☆☆一般人☆☆☆

・那覇（なは）　翔（しょう）　（15）
「ヤンデレでドン！」の主人公。中3。それぞれ、相手によって口調を変えるめんどくさい性格。
一番身近な幼馴染み・ジェシカには「～ッス」と下から。
洋画好きで、邦画が苦手。

・川崎（かわさき）　ジェシカ　（15）
本人曰く「ベラルーシとウズベキスタンのハーフ」。川崎三姉妹の次女。
日本のアニメ（特に深夜アニメ）とアニソンをこよなく愛するオタク少女。
パソコン部の部長で、部活内でのあだ名は「変態」や「痴女」。学校以外での服装は、大概コスプレ。
翔と同じで洋画が大好きで、邦画を軽視している。

・川崎　雪（ゆき）　（13）
本人曰く「アゼルバイジャンとスウェーデンのハーフ」。川崎三姉妹の三女。
オデコが広いことを気にしている中学1年生。
笑いのツボが一般とズレていて、例えば、机に置いてある他人の教科書の向きを逆にする、など、シュールにシュールを重ねた事に面白さを見出だしている。
他にも、「謎の」や「～になっちゃうよ！」という言葉を面白がってる。
自分だけ純日本名であることに疑問を感じてる。

・川崎　レベッカ　（１７）
本人曰く、「インドとアンディグアバーブーダのハーフ」。川崎三姉妹の長女。
雑でめんどくさがりだが、１８禁アダルトサイトには入らなかったり、無駄にきっちりしてる。
男っぽい口調だが、運動神経は無い。
反抗期真っ盛りだが、たまたま翔の家で映画「Ａ．Ｉ．」を観て、感銘を受け、親孝行をするようになる。

・浜松（はままつ）　夏海（なつみ）　（１５）
一人称は「浜松」。ドジっ子で毒舌家。しかも説教癖がある。キレると騒ぎ出す。
その割りには、弁当にドリアンなどを持ってきたり、ボケたがる癖があるが、すぐ緊張して、口ごもってしまい、いつも空回り。

・函館（はこだて）　冷（れい）　（１５）
クリスチャン。ダイエット中。聖書を常に持ち歩いてるが、実は「バベルの塔」までしか読んでない。
弁当を食べる前にお祈りを欠かさない。しかし、お祈りが曖昧で一斉にツッコミを受ける。
神経質で、いろいろなことに対してすぐ反応する。でもって声が大きく、迷惑がられる。

・三浦（みうら）　南海（みなみ）（１５）
転校生。金髪でケバくて鋭い目をしてるが、それは前の学校でお人好しキャラで失敗したため、無理してキャラを作っているだけ。
優しさが滲み出て、たまに人が良いことがバレそうになる。

★★★ヤンデレ様★★★

1、木更津（きさらづ）　かずさ（17）
翔の家の近所に住む無口な高校生。

2、宮崎（みやざき）　千秋（ちあき）（23）
小学校の新任教師。翔の歳の離れた幼馴染み。

3、長崎（ながさき）　遠依（とおい）（13）
翔の隣の家に住む中学生。排他的で、翔以外の友達を作らない。

他にもいるよ☆

第1話　転校生モンスターと転校生！

「翔ちゃん、聞いた！？」

ジェシカは教室のドアを開けるや否や、目を輝かせた。真っ先に視線をやったのは、まだ生徒がまばらな教室の、片隅の席でポツンと座って窓の外を眺めていた、翔（しょう）だった。

翔はゆっくりと体を捻り、ジェシカと目を合わせた。

空いてた席から適当に持ち出した椅子に座り、その席の生徒がたじろぐのもお構い無しに、ジェシカは翔に顔を近づけた。その顔は莞爾という言葉以外思い当たらないぐらいに綻んでいた。

「ねえ！　聞いた！？」

「え？　どうしたんスか？　なんの話ッスか？」

翔はあまりの迫力と唐突に「聞いた！？」と訊かれたことに混乱し、目を丸くした。顔が近いことよりも先に、ジェシカの異常なまでのテンションの高さが気になった。

オレンジがかった髪は首元まで伸びていて、瞳は青く、他人よりも彫りの深い顔は、日本人ではないことは明々白々だ。肌は白く透明感があり、頬は、リンゴ病の発赤を彷彿とさせるほど赤かった。

顔が近いのを恥ずかしがることなく、嬉しそうに、体を揺らす姿は、少しでも衝撃を与えれば膨れ上がった風船さながら大きな音を立てて破裂しそうだった。

「とにかく、大変なの！」

ジェシカはまた、叫んだ。語調は強く、噛み締めるように両手を握りしめる。

翔は、自らの閉口具合をフィルターにかけることなく、そのまま表情にし、周囲に一瞥を与えた。ジェシカに席を取られた生徒がどこか物寂しげに犯人の後ろ姿を眺めるだけだった。

「何が大変なのか、言ってくれないと、困りますよジェシカさん」

視線をジェシカに戻すと、やはりジェシカの顔が近い。今度はそのことに驚いて、反射的に身体が仰け反る。

「何がって、転校生よ転校生！　転校生！」

ジェシカは、嬉しそうに「転校生」という言葉を繰り返し、一人で跳び跳ね、盛り上がる。

ひとまず顔が離れたことに安心し、体勢を元に戻し息を吐く。

体育の授業があるわけでも、運動部に所属しているわけでもないのに、ひとえに「めんどくさいから」という理由でジェシカは普段からジャージ上下を着ていて、彼女が制服姿の時は、ほとんどが集会など、制服を強制された時だけだ。

ふと、ジェシカが小さく「ドンビドンドン」と口ずさんでるのが聞こえた。

それがクッキーモンスターの真似だとはすぐにわかった。

「クッキーモンスターって、自分を抑え込むのが苦手なだけで、案外、まともなキャラなんだよね。それに可愛いし」数年前にジェシカが淡々と語っていたのを思い出した。「クッキーとか食べ物を目の前にしたら、興奮してすぐに口に入れちゃう」

今の「転校生」に興奮してはしゃぐジェシカが、食べ物を前にした、もしくは食い荒らしているクッキーモンスターに見えて少し頬が緩んだ。

同時に、転校生がジェシカの欲を掻き立てたのか？　と可笑しくもなった。

「女の子だって！」

ジェシカがまた、翔に顔を近づけた。

「女の子に興奮してるんスか？」思わず声を洩らした。

「私がレズなら、翔にこんなに顔を近づけたりしない。気色悪い」

ジェシカは目を細めた。

「どんな子が来ると思う？」

表情を元の溌剌としたものに戻すと、ジェシカの吐息がはあっと翔に吹きかかる。

恥ずかしさからなのか息を止めてしまう。目を他所に向け、「えーっと」と考え込むフリをする。

「三浦（みうら）　南海（みなみ）！」

フライング気味にジェシカが言う。明らかに翔の答えなど待っていない風だった。

翔の脳裏では、まだ「どんな子が来ると思う？」という言葉が反芻（はんすう）していた。合いの手を打つように、合間合間に「適当な女」という言葉も繰り返された。

「さっき会ったんだ。握手してきた！」ジェシカは自慢気に右手を翔に見せた。「でも、そんな良い子じゃないね」。ジェシカの表情が一瞬だけ曇った。「だって、私に『ははははははＨｅｌｌｏ！』って言うんだよ。すごい焦ってた！」

「仕方ないっスよ。それはジェシカさんが外国人の顔をしてるから」

するとジェシカはひどく落胆した様子で、「はぁー」っと溜め息を吐いて翔の机に顔を伏せる。

ひょこんと顔だけ上げると、「だからハーフって辛いんだよねー」と眉をひそめた。

「ジェシカさんって、どことどこのハーフでしたっけ？」翔は半笑いで言った。

ジェシカは上目で翔を見ると、迷うことなく言った。

「ベラルーシとウズベキスタン」

第2話　うるさいですよ！

「三浦南海、よろしく」南海は声を張った。

唖然とする生徒たちの視線の中を恥ずかしがることなくずかずか、堂々と歩き、空いていた席へ移動した。

黒板には大きな字でしっかり「三浦南海！」と書かれていた。

「あの……」

担任の女教師が声を掛けたのは、すでに席に座ってからだった。

「なんですか？」

鋭い視線と刺すような声に、担任は一瞬同様する。

長い髪は金色に染められていて、眉も剃られ、あからさまな不良生徒だった。

「み、三浦さんの席はそこじゃなくて、こっち」担任は離れた別の席を指差した。「そこは、飯田君の席、今日、風で休みなの」

南海は指差された席に目をやる。その後で周囲をぐるりと見回す。相変わらず生徒は目を丸くしている。

南海の額には汗が滲んでいて、状況から考えて、恥ずかしさからの明らかに冷や汗だ。

何の意地なのか、南海は担任をキッと睨んだ。すぐに、机の上に置いた鞄を持ち、席を移った。

南海の席は、ジェシカの隣だった。

「よろしく、私、ジェシカ、さっき会ったよね」

ジェシカは怯むことなく優しく声をかけた。

ジェシカの脳裏には、声をかけたことで跳び跳ねて驚いた南海の姿が浮かんでいた。

「覚えてない」南海は短く、言った。

「ううん、覚えてるよ。だってさっき会ったもん。握手だってしたよ」

ジェシカは右手を突き出して見せつける。

南海は煩わしそうに横目でそれを見やると、無視して視線を前に向ける。

「みっちって、映画とか観る？　私は、よく観るよ。３Ｄ映画はＩＭＡＸでしか観たことないんだけど、普通の劇場だとどうなの？　すごく気になるんだよね」

無視という概念は無いと言わんばかりにジェシカは続けた。

教壇の上では担任が話し込んでいたが、南海はそれを聞く気などさらさら無かったが、ジェシカの方には絶対に視線を向けないと、た

った今、決めた。

しかし、いつの間にか自分のことを「みっち」と呼んでいたことを、鬱陶しさが追い越し、頭の周りをぐるぐると回って集中力をかき乱した。

「邦画ってどう？　私はあんまり好きじゃないんだよねえ。なんかこう――」

得意気に語るジェシカは、気がつくと南海と目が合っていた。

「うるさいですけど！」南海はまた、声を張った。

それと同時に別の生徒が、「うるさい！」と叫んで、そっちに視線がいった。

担任の声も止まり、生徒の視線が声の方へ向く。

それを辿ると、立ち上がり、二人の方を睨む女子生徒が、いた。この三年二組の学級委員、浜松（はままつ）　夏海（なつみ）だ。

南海も体を捻り夏海の方を見る。一見、小学生にも見える小柄な姿が目に入った。夏海は堂々と腕を組んでいた。

「誰の妹？　あの幼稚園児」南海はボソッと呟くように言った。

すると、何やら物音がした。夏海が動揺したのか椅子に足をぶつけた音だった。

「小学生ならしょっちゅう言われるけど、幼稚園児はあんたが初め

て。この擦れっ枯らしの、アスホールズベ公が！」夏海は南海に向かって中指を突き立てる。

発音良く「アスホール」と言ったことに、ジェシカは思わず吹き出してしまう。

「浜松さん！」担任がすかさず叫ぶ。「いけません、その指。あと、言葉遣いが悪すぎます。もっと優しく声をかけてください」

夏海は担任の方を向くと、「アメリカとか海外なら、これが悪い意味になるかもしれないけど」中指を立てながら言い訳を始めた。「別にこれが日本人にとって罵る意味になるとは思えません！」

「とにかく謝ってください！」

担任が南海に一瞥をくれると、怒りからか、微かに震えているのが確認できた。

「じゃあわかりました」夏海は南海の方へ向き直った。「訂正します」

「訂正？」と担任が言うのより先に、夏海は思いっきり右手を突き上げてから、一気に顔の前までふり下ろした。一瞬の動作だった。

親指を下に向け、にたりと笑い「これなら日本人でもムカつくでしょ？」と言った。

「どっちも一緒」ボソッとツッコんだのは、翔だった。それと重なるように「なっち性格悪いー」とジェシカが目を細める。

「おとなしい金髪眉無しと、騒がしくて口が悪くてバカなチビッ子、どっちがまとも？」南海の頬が緩む。

南海と夏海のことを言ったのだろうが、自分で自分のことを「おとなしい金髪眉無し」と表現したことに生徒は驚く。

南海は何事もなかったかのように、余裕の表情で前へ向き直った。

怒りで平常心を失ったのか、夏海は顔を真っ赤にして「アイロニー！」と前屈みになりながらも、発音良く叫んだ。

「あそこまでなっちを怒らせたのは、みっちが初めてかも」ジェシカは南海に、小声で、耳打ちするように言った。「バートみたいな顔してるもん」

南海は一瞬「バード？」と思ったが、「ああ、バートね」と、何のことを言ってるのかわからないながらも、納得した。しかし、ジェシカの声に耳を傾けていたんだと気が付くと、顔を振って、頭にしがみつくジェシカを振り払った。

ふと気が付くと、ジェシカの姿が席に無かった。今のでどこかへと吹き飛んだのか、と一瞬だけ安心。だが、そんなバカな話無い、と我に返る。

喚き散らす夏海の方へ視線を向けると、ジェシカが夏海の前に立っていた。

夏海の視界にジェシカは入っていなかったため、夏海はジェシカの存在に気がつかない。

「カーワーバンガー！」

ジェシカは力強く叫ぶと、夏海の肩を両手で押さえると、「あむ！」と声を上げ、吸血鬼さながら首元にかぶり付いた。

「あん」夏海の喘ぎ声が響く。室内はシーンとする。

ジェシカは畳み掛けるように、何度も甘噛みする。

夏海は噛みつかれた回数と同じだけ喘ぎ声を上げて、気持ちよさげに脱力し、とんと腰をおろす。

彼女はすっかりおとなしくなっていた。

第3話　好きな声優は？（前書き）

ヤンデレが出るのはもうちょい先になりそうです。

第3話　好きな声優は？

授業中、南海の顔がすぐれないのを、ジェシカは見落とさなかった。

「教科書、見せよっか？　忘れたんでしょ」

ジェシカが小声で言うと、南海はムッと不機嫌そうな顔をする。図星だとは、すぐに分かった。

有無を言わさず、ジェシカは机をくっつけようとする。

「あ……」喉に何かが突っ掛かったのか、南海は口を小さく開けたまま静止する。ジェシカの顔が至近距離にまできていた。

南海はごそごそと脇にかかった鞄を漁り、手鏡を取り出すと、ジェシカには見えないように自分の顔を確認した。

化粧をしていたわけではないので、化粧が崩れたわけでもない。

ただの金髪眉無しが、鏡にうつっていた。

「そうよ……」小さく、短く、言い聞かせるように呟くと、鏡を鞄にしまい、ジェシカを睨む。

顔を少し下に向けて、上目で睨む、なんとも、わざとらしい。眉無しなだけあって、少しは怖かった。

「スーパーサイヤ人3もさ」ジェシカは全く動揺する様子などなかった。「眉毛無いよね。髪長いし、金髪だし」

「はぁ？」南海は威圧するように顔を近づける。

「私女の子とキスとか、したことないけど、一度はしてみたかったんだ」

やはりジェシカは怯まなかった。それどころか、さらに顔を近づけ、南海の唇に自らの唇を重ねた。

誰かがそれに気がつき「おい！」と声を張り、二人を指差す。二人のキスは、大衆環視の中に晒された。

「何やってんスか」冷静に言ったのは、翔だった。「ジェシカさん」

南海は、一瞬、何が起きたかわからずに、止まってしまったが、すぐに我に返って、ジェシカを押し倒す。

がしゃん、という音と「きゃあ！」という悲鳴が室内に響く。

「何やってんだ！」国語の教師が怒鳴る。

「ジェシカさんが三浦さんにキスしたら、三浦さんが嫌がってジェシカさんを押し倒したんです」翔が起き上がろうとするジェシカを指差す。

「違います」倒れた椅子を戻し、ジャージをはたいて座り直したジェシカは、ピシッと手を上げた。「みっちは確かに言いました。『今はダメ！』って。これって、後でなら良いってことですよね？」

もちろん、南海が「今はダメ！」だなんて言ったはずはない。教室

内は呆れた空気でどんよりする。

「とにかく、今は授業中なんだから」国語の教師はチョークでジェシカと南海をさす。「授業が終わってから解決しなさい。いいですね」

ジェシカは悪びれながらも横目で南海を見る。怒りに身体を震わせる南海がいた。顔はうつ向いて、どんな表情をしているのかわからない。

ただ、この上無く不機嫌だということだけはわかった。

「ドンマイ」ジェシカは南海の肩にポンと手をおく。すかさず、南海は「うるさい！」と素早い動きでジェシカの手を払う。その目は、うっすらと潤でいた。

「そうだ今日さ、近所の高校生の女の子がいるんだけど、その子、なんか変なんだよね。先輩だけど。放課後追跡するんだ。みっちも、どう？」

ちらりとは見えたはずの涙顔をすっかり忘れた様子で、誘う。

「ジェシカちゃん」後ろの席の女子生徒がジェシカの肩を叩く。

「なあに？」ジェシカは間延びした声で反応し、身体を後ろに向ける。

いざ後ろを向かれると、女子生徒は気後れしてしまい、身体が自然と仰け反る。

ジェシカは顔を傾け、不思議そうな顔をする。女子生徒が何か言いたそうだと、振り向いた直後に察知していた。

「え、えーっと……」女子生徒は目を泳がせて、挙動不審だ。

「早く言ってよ」ジェシカは身体を揺らして急かす。「なに？　なに？」

女子生徒は深呼吸すると、ジェシカの目を見る。

「アニメソングは聴きますか？　それと、三浦さんが可哀想です！」取って付けたような、というより意味不明な言葉だと、言ったそばから思ったが、言い直す勇気は無かった。

「もちろん、そりゃ聴くよ！」ジェシカはにっと頬を緩める。

「三浦さんが可哀想です！」が本命だった女子生徒にとって、期待外れの応えだった。それも自分が悪い、と言い聞かせる。女子生徒はアニメソングに興味などなかった。

「え？　聴くの？　アニソン」ジェシカは女子生徒の心の内は察知せず、ずかずかと踏みいるように追求する。

「え、その……」女子生徒は絵にかいたような狼狽をする。目は泳ぎ、助けを求めようと周囲を見るが、誰もこの状況に気づかない。声をかける勇気もなければ、教師に伝えることもできなかった。

「私は、ちょっと地味って言われるけど、坂本真綾が好きだなあ。みんな、水樹奈々が好きだっていうけど」

当然、女子生徒には何の話か理解できない。

「真綾は、『プラチナ』とか『トライアングラー』とか、アニソンが注目されがちだけど、もっと掘り下げれば、いっぱいいっぱ良い曲あるよ」ジェシカは構わず続ける。指を立てて得意気に語る。「例えばほら、『Tシャツ』とか『オレンジ色とゆびきり』とか『パイロット』とかね」

女子生徒は「は、はあ……」としか返事ができず、それよりも、自分に「好きなアニソンは？」と質問された場合のことを懸念する。

「好きな声優は？」予想は外れたが、もっと難しい質問が飛び出した。「せいゆう」と言われて一瞬、大型スーパーのことを思い浮かべる。

「ま……」

「ま？」一瞬、脳内で「ま」で始まる声優を探ったが、すぐには見付からない。

「ま、的場浩司……」

思わず、プッと吹き出したのは、ジェシカではなく、南海だった。

第3話　好きな声優は？（後書き）

作者が真綾好きなだけです。

第４話　偽シスター、現る！（前書き）

わかりづらいネタふんだんに使ってしかいましたw

第４話　偽シスター、現る！

ジェシカと南海のキス事件も解決しないまま、四時間目が終わり、昼食の時間になった。

いつもは、班もつくらず、一人で弁当と椅子だけ持って翔の席まで行って食べるが、この日は転校生と喋りたかったため、律儀に、机を動かして班を作る。

「にしし」とジェシカは声に出して笑う。正面の南海の顔を嬉しそうに見る。

南海はジェシカに恐ろしさを見いだしていた。「まさに憎悪だ」と心の中で唱える。彼女の頭の中には何故か「ナメクジ人間」という言葉が浮かび、その映像が脳内で再生された。思わず吹き出しそうになるが、グッと堪える。

ジェシカが翔の席に目をやると、彼は寂しそうに背伸びしながらこちらを覗き込むように見てくる。

「ごめんね、今日はみっちがいるから」と顔の前で手を合わせて断る。

翔は、なんだ、と落胆し、へたりこむ。

「行けばいいのに」南海がボソッと呟く。「彼氏でしょ？」

「私の彼氏はパソコン画面にるから」珍しく南海から声をかけてきたことが当たり前のように、平然と返事をする。「そりゃ、翔ちゃ

んとは幼馴染みで、仲も良いけどさ」

南海は、自ら声をかけたことを気づかないように、こっそりと鞄からランチボックスを取り出す。

「みなさん！」一人の女子生徒が立ち上がり、澄んだ通る声で言う。「転校生が来たからって、お祈りが無くなるわけではありません！」

女子生徒は修道服を着ていた。教室内では随一、目立っている。名前は、函館（はこだて）冷（れい）。校内では有名なクリスチャンだ。しかし本当にクリスチャンなのか、疑問の目が向けられている。

南海は、どうして今まで存在に気づかなかったんだろう、と視野の狭さを悔いるべきか、集中力をほめるべきか、戸惑った。

「シスターに日直の仕事を奪う権利はない！」男子生徒が野次を飛ばす。「サンプリス姉さんを見習え！」

二世紀前の小説に登場する人物をなんと親近感のある「姉さん」と付けて呼んだのには、誰も気づかない。

「お祈りの時間です！」冷は男子生徒を無視し、「お祈り」を始めようとする。

「気を付け！」別の男子生徒が叫ぶ。彼が今日の日直だった。

「嗚呼、父よ！」冷も負けずに祈りを開始する。「あなたの慈しみに感謝して、このお食事をいただきます！」

「いただきます！」日直の男子生徒が叫ぶと、「いただきまーす」

と生徒たちは一斉に繰り返す。

「辛いこともあったけど」冷は祈りを続ける。「やっぱり、嬉しいこと方が、なんかねえ、まあ、明日は来るわけだし、うーん、なんというか」祈りは完全に脱線していた。

生徒たちは思い思いに食事をしていて、冷には目もくれない。しかし、依然として冷はしゃべり続ける。弁当も出さず、机の上には聖書だけが載っていた。

「アーメン」と締め括ると、腰を下ろし、もぞもぞと鞄から弁当を取り出す。

「あれ？」冷を観察していたジェシカが何かに気がついて箸をとめる。

冷と目が合う。冷もジェシカに気がつき「ん？」と不思議そうな顔をする。

「冷ちゃん、頭、どうしたの？」

ほとんどの生徒には、冷をバカにした言葉に聞こえた。思わず吹き出す生徒もいた。冷は、それを意に介すことなく、「ああこれですか？」と額を触った。

冷の額には絆創膏が貼ってあった。

「これは、ちょっと、ね」

「ちょっと？」

「うん、冷蔵庫を開けましたら、偶然、コントレックスが落ちてきまして……」

「『コントレックス』って、あの、フランスの水の？」

「はい。上の棚の許容量と、コントレックスのペットボトルの大きさが全く一致していなくて」

「大変だね」

「まあ、その時はコントレックスを取ろうとして冷蔵庫を開けたので、時間短縮にはなりました。いつもは取るのに三秒ぐらいかかるんです。ラベルの確認とかで」

その場にいた誰もが、担任までもが「ラベルの確認？」と心の中で言う。

「あ、でも、痛がる時間が十秒ぐらいありましたから、結局、七秒損してますね」冷は、たはは、と笑った。

気がつけば、ジェシカは箸を黙々と動かしていた。ひどく呆れていたが、表情に出さなかった。

冷も、慣れているのか、けろりとしていて、ランチボックスのフタをあけ、他人（ひと）より遅めの昼食を始める。

教室内はしんとしていて、箸を動かす音だけが響く。

「これから、お昼の校内放送を開始します」教室のスピーカーから

視聴覚委員の女子生徒の声がする。

依然として生徒たちの反応は無い。いつものね、という声にする必要性のない言葉が心の中に現れるが、一瞬で消える。

「本日は、リクエスト曲をお送りします」

いつもそれだろ、とやはり声に出すほどでもない言葉が浮いては沈む。

「まず最初のリクエストは、三年二組の、那覇翔さんからのリクエストで、Ｔｅａｒｓ　Ｆｏｒ　Ｆｅａｒｓ（ティアーズ　フォーフィアーズ）で、『Ｍａｄ　Ｗｏｒｌｄ』です」

音楽な流れ出す。曲調で、すぐに古い曲だとはわかった。

「誰？　てぃあーずふぉーふぃあーずって」ジェシカは落ち着かない様子で翔を見る。

「『恐れのための涙』って意味ッス」翔がすぐに応える。

「何それ」ジェシカは鼻で笑う。「中二っぽい」

「まあ、ジェシカさんが涙して聴いてた、エヴァンゲリオンの『Ｋｏｍｍ，ｓｕｓｓｅｒ　Ｔｏｄ』に匹敵するぐらい、もしくは越すぐらい泣ける曲っス」

「へえー。これ、アニソン？」ジェシカは天井を指差す。

「違うッス。でも、ゲイリージュールのカバー版が映画の挿入歌に

使われたッスね。『ドニー・ダーコ』ッスよ。前に俺の部屋で観ましたよね」

「……ああ、あの変な映画ね。確かに観た観た。最後主人公が大爆笑しながら死んじゃうヤツでしょ？　全然意味わかんなかった」

「ジェシカさんは一回しか観たことないからそうなるんスよ。しかも、アホみたいに携帯弄くり回してたじゃないスか。ちゃんと、二、三回観れば、話、理解できまスよ？　すっごい深い映画ッス！」

翔が語り出しそうな雰囲気を醸し出したため、ジェシカは「なるほどね」と無理矢理話を締める。

気が付くと曲は終わっていた。

「続いてのリクエストは、三年一組の、川崎ジェシカさんからで、ｆｒｉｐＳｉｄｅの『ｏｎｌｙ　ｍｙ　ｒａｉｌｇｕｎ』です」

その途端、「キター！」とジェシカが叫び、立ち上がる。イントロが流れだし、さらに興奮する。

「私の時代だねっ！」ジェシカは指を鳴らす。教室内のテンションとは、まさに真逆だった。

翔も自分のリクエストが終わり燃え尽きている、というよりは、何やら腑に落ちない様子で、ランチボックスを鞄にしまい、頬杖をつく。

第5話　ジェシカってそういうヤツだから（前書き）

カラオケで、ダニエル・ビダルがなかったからって、仕方なくティアーズ・フォー・フィアーズ歌うと、強制的に中断させられるよ。
友達に。
やってみたらいいよ。

第5話　ジェシカってそういうヤツだから

放課後、この日は職員会議があり、全ての部活が休みだった。ジェシカと翔は二人して校門を出る。

「翔ちゃん、あんた、何か最近、周りで変なこと、起こってない？」

ジェシカの質問は唐突だった。翔は一瞬だけ足を止める。

「何スか？　変なことって」

「うーん。例えば、何か、人の気配とかさ」

「人の気配、スか？　うーん……」

翔は困った顔をし、一応うわべだけは、腕を組む。「街を歩けば人の気配しかしない」という屁理屈にも似た冗談を思い付いたが、言うほどのことじゃない、と喉まで来ていたものを呑み込んだ。

「なんか、ただならぬ気配っていうの？」ジェシカは続ける。「変態女なんて、どこにでもいるようなもんじゃないしさ」

「変態女」とジェシカが言った時、翔の頭の中では真っ先にジェシカの顔が浮かぶ。コスプレをして、ひからかす姿だ。ナース服や見知らぬ謎の体操服、アニメに出てくる架空の制服など、バリエーションは様々あった。

「変態女ッスか」翔は少し遅れて間延びした声を出す。「そんなの、いますかねえ」依然として翔の頭にはジェシカが浮かぶ。「怖いッ

スね、でも。まずなんなんスか？　変態女って」

「ねえ翔ちゃん」ジェシカは一際大きな声で言う。

「え？　何スか？　ジェシカさん」翔は一瞬、ビクっとしたが、すぐに耳を傾ける。

ジェシカは何かを思い出すように、視線を宙に浮かべる。視線は導火線となって戻ってきた。バチバチと火花を散らして、パチン、と爆発音とも言えない小さな音を発する。それに合わせてクイっと翔の顔を見る。

「ジェシカさん？　どうしたんスか？」翔は、振り向くまでの間が気になり、そっと訊ねる。

「かずちゃん、どう思う？」

長い間の割りには短い質問だった。翔は思わず、「なんだ、そんなことか」と拍子抜けしてしまう。

「かずちゃん」という名前は、翔にとっては聞き慣れた名前だった。「木更津（きさらづ）かずさ」だから「かずちゃん」と、単純なあだ名だ。

近所に住む、二つ歳の離れた先輩で、それほど親しくはない。というのも、彼女は非常に朴訥（ぼくとつ）で、存在感も薄い。こちらから喋りかけても、一秒にも満たない短い返事をするだけだった。

しかし、たまに、変なことを口にする。夢と現実の区別がつかなくなったような、不思議な話だ。その時だけは何故か饒舌で、普段の彼女とは見違えるほどだった。

「かず姉は、大人しいッスよね」翔は、薄暗いオーラをまとったかずさの姿を思い出して、言う。

「変な人だよね」

ジェシカがそう言った途端、ジェシカの言う「変態女」は、もしかしてかずさのことなのか、と察知した。

「そうッスね」

「前なんか、私にこんなこと言ってきたんだよ。『ジェシカちゃん生きてたんだ。殺したはずなのに』だってさ！」

「何スかそれ？」

「私もそう思ったよ！　すぐに『あ、夢だった。ごめんなさい』って。私怖くて震えちゃったもん！　ずーっと、ただ者じゃないとは思ってたけど、やっぱりあの子、変だよ。変変。もしかしたら、宇宙人なのかも！」

ジェシカの冗談、というよりは戯言は、翔の耳はほとんど届かなかった。耳が勝手にシャットアウトする感覚だ。

「あの子、翔ちゃん家の近くでよく見かけるんだよね」ジェシカは翔に肩を寄せ、顔を近づける。

「そりゃ、ご近所さんスから」翔は恥ずかしそうに目を逸らす。

「そんなのは捨てよ！　捨て捨ての大前提。そうじゃなくて、翔ち

ゃん家の、周りで見るの。前だって、塀の外から覗いてた！」ジェシカの声は高く、大きくなる。「俗に言う、ストーキング、なのかも！」ジェシカの唾が顔に飛ぶ。

「す、ストーキング、スか？」翔は辟易（へきえき）してしまう。

そそっかしいジェシカに簡単に雷同するわけにはいかないが、ジェシカの迫力に圧倒され、気づいた時には「そうかも」と口にしていた。

「翔ちゃん、スティーブンになっちゃう！」

ジェシカは翔の肩を両手で掴む。二人は小さな橋のちょうど中心で立ち止まる。

「す、スティーブン？」

「そう、スティーブン！　そんでもってあの子がケシャ！」

「スティーブン」といきなり言われた時はなんのことかと思ったが、「ケシャ」という言葉が出てきて、すぐに何のことかわかった。

ケシャは、外国の女性歌手で、彼女の歌に『スティーブン』というのがあった。

内容は、ある女性、というかケシャが、スティーブンという男性をストーキングする日常を書いた歌だ。スティーブンの彼女を「あのブスな女」と罵ったり、怖い内容であることは覚えていた。

その歌が収録されたＣＤを持っていたのはジェシカだ。

「言っとくけど、あれは実話らしいからね」ジェシカは翔が何の話をしているか、理解した前提で続ける。実際、理解していたため、困ることはなかった。「パリス・ヒルトンん家でゲロ吐いたのも！　あんた、あの子を絶対に家に入れちゃダメだからね！」

翔は「ワイン飲み過ぎてゲロを吐くから？」と訊ねたくなったが、やめた。

「なんてったって、ストーカーなんだから、ゲロ吐いたって吐かなかったって、ストーカーに変わりはない！」

「いったい何を言ってるんだ」と心の声が洩れそうになる。

「結論！」ジェシカは、翔の胸に人差し指をあてる。「あんた変態女にストーキングされてるよ！」

心なしか、ジェシカの声は、トンネルの中さながら、何度も響く感覚があった。

「早合点、なんじゃないスか？」翔は思いきって、言う。「そんな簡単に決めつけて」

「私は感がよく働くの！　犬の十倍！」

「犬の十倍」は果たして、高いのか、低いのか、それ以前に何故、犬と比較したのか、翔は混乱する。

「何か変なことされたら、すぐに言って！　『助けて！』って」ジェシカは得意気に指を立てる。

翔にとっては、今すぐにでも『助けて』と言いたかった。

歩行者の視線が気になり、目が泳がせる。

「裏付けはまだこれからだけどね」

ジェシカは満足げに言うと、帰路を再び歩き出す。

翔は「はあー」と呑んでいた息を惜し気なく吐き出す。捲し立てるジェシカの独り善がりから解放された安心なのか、ただ呆れているのか、ごちゃごちゃした溜め息だった。

第5話　ジェシカってそういうヤツだから（後書き）

〜〜雑談〜〜

和也「なあ理彩、俺の抱き枕で寝るのやめてくれよ」

理彩「どうして？　ヨダレは垂らしてないよ？」

和也「せっかくのセサミストリート抱き枕なんだよ！　新品なんだよ、まだ。ビッグバードの顔が潰れちゃったよぉー。ほら見て、めっちゃブサイク」

理彩「ビッグバードならいいじゃん」

和也「あとヨダレ垂らしてないっていうの、嘘だろ。グローバーの口元がうっすら濡れてる」

理彩「そりゃ、そんな口開いてたらヨダレぐらい垂れるよ。でも私のヨダレじゃないよ、それ」

和也「クッキーモンスターの方があいてるよ。それに、お前の臭いがするんだよ。気持ち悪い臭いがさー」

アスカ（後期）「へえ、和也って、いつのまに理彩ちゃんのヨダレのにおい識別できるようになったんだ？」

和也「お前がグレる前からだよ」

アスカ（前期）「そ……そう、なんだ」

和也「ヨダレの話はもういいよ。とにかく理彩、金輪際、俺の抱き枕で寝るなよ」

理彩「えーなんでー」

和也「お前ん家にはコタツがあんだろうが。バカみたいにあたたまりやがって。『はーふー』じゃねえよ！」

アスカ（前期）「今日の和也くん、なんだか、怖い……」

ジェシカ「ねえ翔ちゃん、この人たち、誰？」

翔「え？　ジェシカさんの友達なんじゃないんスか？」

ジェシカ「私こんな人たち知らないよ？」

翔「じゃあ多分、冷の友達ですよ」

ジェシカ「ああ！　納得」

第6話　レベッカ、アンジェリーナ・ジョリーに興味を持つ。（前書き）

バカみたいなタイトルですよね「17歳のカルテ」って。

第6話　レベッカ、アンジェリーナ・ジョリーに興味を持つ。

翔は、ジェシカの部屋に、いた。室内には翔とジェシカの二人以外にも、ジェシカの妹で、川崎三姉妹の三女である雪（ゆき）と、長女・レベッカもいる。

「ジェシカさん？」

翔は、ジェシカの後ろ姿に向かって訥々と訊ねる。

ジェシカはコントローラーを握り、パソコンのディスプレイに向かって時にはにやけたり、時には「最悪！」と嘆いたり、集中していて、俺の話なんて聞こえていないんじゃないか、と察して控えめになる。

雪はベッドで寝転がりながら携帯ゲーム機に専念し、レベッカは椅子にだらっともたれ掛かって、なにやらＤＶＤのパッケージ裏を凝視していた。

「なあに？」少し経ってから、ジェシカが返事をした。

「裏付け、どうしたんスか？」と翔はすぐに返事をする。

「裏付け？」

「さっき、ジェシカさん、言ってたじゃないスか。ストーカーがどうこうって。結局、裏付けはやらないんスか？」

「ああ、それは私もたいへん遺憾に思ってるよ」ジェシカは間延び

した声で、政治家がよく言う言葉を真似た。「でも、今はこっちの方が大変」

ディスプレイの中では、重々しい装備をした女性キャラクターが無様に、大きな龍のようなモンスターから逃げていた。かと思うと、きゅっと踵を返し、モンスターに立ち向かい、大きな剣で斬りかかった。

「いけ！」ジェシカの声が洩れる。

時には立ち止まり、ジェシカはキーボードの方に手を置く。その動きは素早かった。すぐにコントローラーを操作する。

ディスプレイ中央に、何やら文字が出ると、ジェシカは思わず「アイツ、死にやがった。いっちょまえに飛び込みやがって！」と語気を強める。

しかしジェシカがキーボードに向かって打った文字は「ドンマイです」だった。

「ジェシカさん」翔はもう一度訊ねる。

やはりすぐには返事がない。コントローラーをがちゃがちゃ動かし「大体、こんなデカイの、ハンターの管轄じゃなだろうっての！」と呟く。

ゲームをプレイする時のジェシカは、つい熱が入り、口調が悪くなる。翔は、ジェシカとは十年以上の付き合いだが、いい加減さや、優柔不断さは慣れていても、ゲームに関してのことだけは慣れなかった。

二年前に一度、説教をしたことがあった。

「ポケモンは、相手を見下して侮蔑(ぶべつ)するためのゲームじゃない！」翔の語調は強く、目尻には涙があった。「もっと楽しいものだ！それを壊してるのがお前だ！　悪魔め！」

いつもの「ジェシカさん」や「〜ッス」という下から口調の翔は元々なかったかのように、眉をひそめ、喚いた。

ジェシカは目をぱちぱちさせ、いまいち状況がのみ込めてないようだった。

「ずっと前から言いたかったんだ！　お前のゲームのモチベーションはおかしい！」翔は立ち上がった。

「お前はゲームをなんのためにやってんだ！　ピンチになれば愚痴り、負ければ、死ねばキレて！　だいたい、機械的なんだよ！　この世の終わりみたいにプレイしやがって！　機械的にラスボスまで行って、それで終わり。楽しむ気が全くない！　お前はゲームをやる人じゃないんだよ元々！　向いてないね！」

翔の熱のこもった雄弁を前に、ジェシカは「うるさい」とだけ静かに言って、翔の部屋を後にした。声は震えて、目には涙を浮かべていた。

その後、数ヵ月に及んで、二人は口をきくことはなかった。

翔も、多少は言い過ぎた、と反省していた。しかし、謝る気はなか

った。むしろスッキリしていた。ずっと心の中に溜め込んで、それがストレスで、それから一気に解放されることは、快感いがいの何ものでもなく、重力が無くなったようにも感じた。

部屋で一人、腑に落ちない思いでいると、それを悟ったかのように、隣の家に住む、長崎遠依（ながさきとおい）が窓から現れた。

遠依の部屋から翔の部屋へは、屋根づたいに行くことができた。そのため、毎日勝手に、遠依が部屋に入り、翔のベッドで寝てたりする。

「どうしたの。すごく、悲しい顔」遠依は、俯く翔の顔を覗きこんだ。

隣に座ると、翔の手をぎゅっと握った。

「いや、ちょっと、ね」

翔は迷ったが、誰かに聞いて欲しくて、ジェシカとのことを語った。

「ジェシカに俺の気持ちは分からない。あんな上部だけのゲームプレイヤーは、ゲームをやる資格なんてない」

遠依は、「翔が正しい」と同調した。

「ジェシカは愚か。遠依は、ジェシカなんかとは違う。遠依は翔の味方。たとえ世界を敵に回しても」そう言った後で、翔に抱きついた。

「なんだか決まり悪いなあ」翔は嘆くように言った。

当時、小学五年生だった遠依に、二つ年上の自分が慰められて、しかも「たとえ世界を敵に回しても」というなんだか映画のような台詞も、言われた身ながら気恥ずかしかった。しかし遠依はいたって真剣だった。

その後、一応はジェシカと仲直りしたものの、その性格が治ったかは微妙だった。

「やってるね。ラヴィエンテ？」

レベッカがひょっこりと顔を出し、翔の横に立った。茶髪で、翔より少し身長が高い。茶髪は地毛ではなく、染めたものだ。

「苦戦してんだ？」とレベッカは嫌味たらしく言う。

「苦戦してんのは私じゃない。この変な名前の奴ら」

ジェシカはディスプレイの左上を指差す。

そこにはプレイヤーの名前が四つ、縦に並んでいた。全て英語だ。

「Ｊｏｈｎｎｙ」や「ｓａｋａｔａ」、「ｋｅｉｋｏ」など単純で面白味の無い名前の先頭にいたのは「ｂａｂｙｆａｃｅ」だった。どうやらそれがジェシカのプレイヤー名らしい。

翔は心の中で「誰が」と呟く。

レベッカも同じことを思ったのか「ベビーフェイスって、どういう

意味？　童顔？　童顔もなにも、あんた童（わらべ）じゃん」と口にする。ジェシカは集中していて返事をしない。

「そうだ翔」レベッカは何かを思い出したかのように言う。「『17歳のカルテ』、ある？　ウチ、あれまだ観てないんだよねー」

「は？　あるけど？」翔は冷たい口調で言う。「貸さないよ？」

「貸せ」レベッカも、負けじと翔をヘッドロックする。「痛てえ！」と悲鳴を上げても、面白がって離さない。

「『17歳のカルテ』っても、十七歳の奴なんて誰一人出てこねえよ！」

「知ってるよ。友達が言ってた。原題は『Girl（ガール），Interrupted（インターラプティッド）』ってんでしょ？」

「じゃあこれは知ってる？」

そう言われてレベッカは翔を一旦離す。「なに？」

「『あんたはもう死んでる！だから誰も押さない。すでに死んでるから。あんたの心は冷えきってる。だからここへ戻る。自由どころか、ここでなきゃ生きられない。哀れね』」

翔は心のこもらない口調で、言った。レベッカは「なにそれ」と、キョトンとしてしまう。

「一番、最後の、クライマックスの台詞。ウィノナ・ライダーのね」

「ネタバレ！」レベッカはそう叫ぶと、再び翔をヘッドロックする。

「大丈夫だよ！　これは字幕版のやつ！　吹き替え版を観ればいい！」

翔は一瞬、力が弱まったのを見計らって、ヘッドロックから逃れた。

「吹き替え版は、『あんたはもうとっくに死んでるからよ！　死んだって誰も――』」

吹き替え版の台詞まで、ネタバレしようとした翔の腹部に、レベッカは蹴りを入れた。

翔は「ぐは！」と呻き声を上げると、大の字になって倒れ込んでしまう。

第6話　レベッカ、アンジェリーナ・ジョリーに興味を持つ。（後書き）

～雑談～

美園「『ヤンデレ少女でドン！』、ね。意外な強敵が現れたわね……」

和也（2）「どうしたんですか？　会長。浮かない顔して」

美園「まあね。『ヤンデレ少女でドン！』っていう小説のせいで、私たちの『用意周到な美少女生徒会長と俺』の話が進まないのよ。どう思う？」

今日歌「作者の話によると、『用意周到な～』って、大雑把なプロットがあったんだけど、最新章は、全く作らず、いつも以上の思い付き、見切り発車だったらしい。ちなみに番外編はいつもそんな感じで作ってたらしい」

美園「だから番外編は微妙な話ばっかなのね……」

今日歌「捨ての章だから、読み返してもないらしい。そもそも『ファインドAウェイ』の間を埋めるために作られた小説だから、その小説が完成したら、全部削除するんだってさ」

美園「私たちって、なんだか可哀想ね」

今日歌「そうでもないよ。なんか、もしかしたらリメイクするかもって」

美園「本当？！」

ジェシカ「そんな夢みたんだ」

翔「……和也（2）って何スか？」

第7話　病みオチだけは勘弁（前書き）

伏線のようなものがあっても、それは伏線のようなもので、伏線ではありません。

第7話　病みオチだけは勘弁

午後五時過ぎ、翔は、家に帰る途中、かずさとすれ違った。制服を着ていて、恐らく学校からの帰宅途中だろう。

彼女はうつむきながら翔の前を通り過ぎた。相変わらずどんよりとした薄暗いオーラをまとっていた。

思わず立ち止まり目で追うと、ジェシカの言葉を思い出す。

「あんた変態女にストーキングされてるよ！」

まさか、と思った。たった今通り過ぎたかずさは、ストーカーどころか、こちらに見向きもしない。やはりデマ、というよりは冗談だろう。と心のなかで息を吐く。

前に向き直ると、すぐ目の前に自宅が見える。足を前に出した。

「あ、あの……！」

弱々しいがはっきりとした声が背後から聞こえた。振り向く。

かずさが、翔に向かって黙々と歩いてきた。

首もとまである髪は清潔そうで、目は二重で、大きかった。彼女の顔をこんな間近で見たのは初めてかもしれない、と翔は思った。

もじもじとする仕草は昔から、初めて会ったときから変わらない。

「な、なに？」

翔は返事に困った。あまり親しくない相手だが、何度かは会っている。敬語で喋るか、ため口で喋るか、悩んだ末、結局、ため口で返事をした。

「え、えっと……」かずさも、話しかけておきながら気後れして、返事に困った様子だった。

バイクの音が徐々に近づき、大きくなり、そして通りすぎていった。

「なにか、用？」翔は早く帰りたかった。

従前、かずさから翔に話しかけてくることなど、一度も無かった。初めての、珍しいことだが、煩わしさも付きまとう。

早く言えよ、翔は心の中で唱える。

「私と！」意を決したのか、かずさは、力一杯、拳を握り締めて翔の顔をキッと睨むように見詰める。「つ、付き合ってください！」

大きな声に、電線にとまっていた小鳥が一気に飛び立つ。周囲には人は少なかったが、その少数が二人の方を見た。

唐突、というほかなかった。一瞬何が起きたかもわからなかった。

「え？」と翔は思わず声を洩らす。

交際を迫られた。とはすぐにわかった。翔の脳裏に真っ先に浮かんだの、遠依だった。無邪気に自分になついてくる姿が鮮明に映し出

される。

遠依はこんなことを言った。

「彼女なんか、作っちゃだめ。絶対に」

返事は既に浮かんでいたが、普段は微塵もない勇気を、奥底から絞り出して、やっと声にしたかずさを「無理」と言って振るのは、あまりにも気が引けた。

気づいた時には「いいよ」と言っていた。

かずさの顔が明るくなるにつれ、翔の顔は青ざめる。

翔にとってはＶＩＰのようで、最優先すべき存在である遠依との約束を破ることは、二人の関係を断ち切ることにも思えた。

「すぐに別れれば良い」と翔は無理やり、楽観的な考えを見い出す。

跳び跳ねる、とまではいかないが、見たことのない晴れた表情をしたかずさは、翔の手を握って、目を輝かせる。

積極的なのか、消極的なのか、印象が迷子になる。

かずさの目尻には涙が、今にも垂れそうだった。

今更ながら、ジェシカの姿も頭に浮かんだ。

ジェシカが何と言うか、長い付き合いだが想像できなかった。

「とりあえず、このことは黙ってよう」と和也は心の中で決める。
住宅街の真ん中というのはあまりにも危険で、誰か、親しい人間に見られてるんじゃないか、という錯覚に陥る。
「と、とりあえず、今忙しいからさ、今度また会おうよ」
翔がそう言うと、かずさはスカートのポケットから携帯電話を取り出した。
携帯なんて持ってるんだ、と翔は心の中で思う。
「番号とアドレス、交換しましょう！」相変わらずかずさの目は輝いていた。
「わ、わかったよ……」
翔も携帯電話を取りだし、お互いに連絡先を交換する。
「じゃあ、俺、急いでるから」
翔は逃げるように走り去った。
かずさは、空を見上げて余韻に浸る。橙色がかった遠い空に「やったよ」と喋るかけるようだった。
翔が家につくと、家族ではなく遠依が出迎えた。
髪は長く、小柄で華奢で愛らしい。

「ただいま」と翔が挨拶すると、遠依も「お帰り」と返す。いつもの光景だ。

遠依は無表情ながら、翔の手を引き、自分の部屋ではない、翔の部屋へ連れていく。

小さなテーブルの前に、翔が胡座をかくと、遠依がそこに座る。

部屋の明かりはつけず、室内は外の明かりで橙色になる。

「友達は、できたか？」翔は冗談半分で訊ねる。

「いらない。翔だけで十分」遠依はすぐに答えた。

遠依は排他的で、翔以外の友達を一切作ろうとせず、それどころか他人と必要以上の会話をしない。

前に見た『ミスト』という映画でアンドレ・ブラウアーが演じていた弁護士の役が『田舎者は排他的だ』という台詞を言っていたのを思い出す。

絶対、遠依の方が余所者を嫌うな　と心の中で笑う。

同時に、『ミスト』がどういう結末を迎えたのかも思い出す。実に晴れ晴れとしない、バッドエンドとも、ハッピーエンドとも言えない、視聴者に問いかけるような終わり方だった。

翔の中では、すごく感動して、叫びたかったが、ジェシカやレベッカの反応はイマイチのように思えた。

「鬱だなぁーこの終わり方」レベッカは腕を組んで首をかしげた。
一応、物語は理解している様子だった。

「え、どういうこと？」ジェシカはテレビ画面を食い入るように観ていたが、本当に観ていたのか疑問に思う。

自分がかずさと付き合うことで、遠依と誰より仲良くしていただけに、思わぬ結末を迎えたら、どうしよう、と背筋が凍りつく思いだった。

第7話　病みオチだけは勘弁（後書き）

～雑談～

歩莉「……？　君は？」

アスカ（後期）「そういうあんたは？」

歩莉「ウチは新島歩莉。『用意周到な美少女生徒会長と俺』のヒロイン、かな？」

アスカ（後期）「ふーん。私は高嶺アスカ。『ファインドAウェイ』のヒロイン」

歩莉「へえー。ヒロインなんだ。見えないー」

アスカ（後期）「そういうあんたこそ。何をする役なの？」

歩莉「ウチは、ほら、和也の面倒みたり」

アスカ（後期）「和也？　和也って」

歩莉「『用意周到な～』の主人公だよ？　それがどうかした？」

アスカ（後期）「こっちの主人公も和也っていうんだよ」

歩莉「へーそうなんだ。作者ってめんどくさがりだね。二作品で同じ主人公の名前だなんて」

アスカ（後期）「でも、そっちは『ファインドＡウェイ』が完成したら消されるんでしょ？　そしたら自動的に和也は一人になる」

ジェシカ「……」

翔「どうしたんスか？　ジェシカさん？」

ジェシカ「やっぱ私、明日の小学校の運動会、行かないわ」

第8話　遠依ってああいうヤツだから（前書き）

セサミストリートの、ホンカーが動いてるところ、見たことないかもしれない……。記憶には一応あるんだけど、たしか、頭が鳴ってた……。

第8話　遠依ってああいうヤツだから

翌朝、翔はいつものようにジェシカ、遠依と一緒に登校する。

遠依は同じ地域に住んでいながら、別の中学校に通っているため、途中で別れた。

校門に近づくに連れ、生徒の数も増え、ざわざわと賑やかになる。

というのも、もうすぐ生徒会の役員選挙も控えていて、校門では役員候補が一般生徒に「私に清き一票を！」と次々に詰め寄り、一般生徒を困惑させていた。

もちろん、翔とジェシカもそれに遭遇する。

「この私に清き一票を！」盛んな女子生徒が、ジェシカの前に飛び出して握手を求める。

上履きに入った三本ラインは緑色で、すぐに二年生だとわかった。

「お金くれるなら一票入れますよ」ジェシカは、丁寧だが間の抜けた返答をする。「あ、でもそれじゃ清き一票じゃなくなっちゃいますね」

ぽかんとする女子生徒を置き去りに、ジェシカは昇降口へ足を進める。呆れながらも、フォローなしに、翔は後を追う。

「そうだ、翔ちゃん」上履きを履き終えたところで、ジェシカが指を立てて、口を緩ませる。「今度、映画観に行かない？」

「映画？　何のスか？」

ジェシカは流行りの映画の名を口にした。それは邦画だった。

「ジェシカさん、邦画、嫌いじゃないんスか？」

「まあそうだけど、すごい人気だからさ。観客動員数とか、すごいらしいじゃん。一位だって一位」

翔は溜め息を吐いた。

遠依に気を遣って、その映画を観に行こうと誘ったことを思い出す。その時、彼女はクールに答えた。

「観客動員数と評価は比例しない」

そっくりそのまま、遠依の心のこもらない、機械のような口調を真似て言った。

「やっぱり？」ジェシカは無理に同調した。玉砕したように見える。

教室に入り、席につくと、翔は昨日の出来事を思い返す。

唐突に、あまり親しくない近所の女子高生から「付き合ってください！」と告白され、軽く「いいよ」と答えた。

あれから、何度か彼女からメールがあった。

「好きな食べ物は何ですか？」「好きな映画は何ですか？」「好き

なアーティストは誰ですか？」ほとんどが、初歩的で短い文章だったが、それも仕方ない、と思い、全てに返信をした。

「明後日、デートしませんか？」という文章がディスプレイに出たとき、一瞬、戸惑った。土曜日である明日は、レベッカと映画を観に行く約束をしていた。映画以外にも、食事やショッピングをする。いわゆるデートだ。それは遠依にも内緒のことだった。

「ごめん、明後日は、無理」と送った。

するとすぐに「何故？」と返ってきた。ずっと絵文字も顔文字もないやりとりをしていたが、「何故」という文章は一際、冷たく思えた。

正直に「レベッカとデート」と送るわけにもいかず、考え込む。すると、数分しないうちに、またかずさからメールが入った。

同じ「何故？」という文章で、一瞬凍りつく。

とりあえず「部活があるから」と嘘のメールを送り、その日は何とか逃れることができた。

携帯を開くと、かずさからメールがきていた。机の下で携帯電話を弄り、身を潜めるような格好になる。

メールは十件届いていた。朝八時から学校に来るまでの約十五分の間に、だ。

「なんだよ」翔は思わず声を洩らす。

「放課後会えますか？」「間違えました。放課後、会いましょう」
「絶対に会いましょう」「一緒に歩いていたあの女は誰ですか？」
「放課後、近所の公園で待ってます。絶対に来てください」「私のどこが好きですか？」「私は翔を愛してます」「私に、なにかできることはありますか？」「あの二人の女とは縁を切ってください」
「放課後、絶対に、待ってます」

全てバラバラで、戸惑いというよりは、恐怖が過った。顔がひきつる。

そして、返信すべきか、悩む。返信するにしてもどれにすればいいのか、悩んだ結果、恐らく本題である「放課後会えますか？」という文に「部活の後なら」と返信する。

数秒しないうちに、返事は来た。

「部活は休んでください」

翔は溜め息を吐く。

辺りを見回し、近くに、ジェシカの姿が見えると、ジェシカを呼ぶ。

「なに？」間の抜けた声を発しながら、ジェシカが近寄ってくる。

「すみませんジェシカさん。今日、部活休んで良いスか？」単刀直入に訊ねる。

翔は、ジェシカが部長をつとめるパソコン部に所属している。特にパソコンが得意なわけでもなく、ただ、楽そうという理由で入部し

た。予想通り、楽な部活だった。

何も言わずに休むのは気が引けた。親しい間柄であるジェシカな許可してくれるだろう、と単純な考えでもあった。

「え？　どうして？」ジェシカは首を傾げる。

「いやあ、色々あるんスよ」

「色々って？」

「遠依のこと、です」

口ごもる翔を不審に思ったのか、ジェシカは体を屈ませて顔を近づけてくる。

恥ずかしがることなく、堂々とそういうことをするジェシカを少しコンプレックスに思っていたはずだが、水面まで上がってくることはなかった。

「遠依ちゃんのこと？」

ジェシカが声を発すると、翔の顔に息が吹きかかる。

「そうです」

翔は顔を遠ざけようとするが、どんどんジェシカの顔が近づいてくる。

「いいよ！」

ジェシカは体勢を元に戻し、口元を緩ませた。

「すみません。遠依、ワガママなんで」

翔はペコリと頭を下げる。同級生に頭を下げることに、頭を下げた後で可笑しいと気づく。

ジェシカは女子生徒に呼ばれ、今までのやりとりを忘れたかのように、廊下へ走り去る。

携帯電話を開き、かずさへ返信をしようとしたが、また、かずさからメールが入っていた。三件あった。

「どうなんですか？」「早く答えてください」「どうなんですか？」

「しつこい女だな」と言葉には出さず口だけ動かす。

「会えるよ」と返信する。

「隠し事ですか？」

背後から声がした。翔は飛び上がり、声を上げて、精一杯驚いた。携帯を落としてしまう。

相変わらず修道服を着た、冷が、後ろに立っていた。携帯電話を覗いていた様で、落ちた携帯電話を拾うと、勝手にボタンを弄りはじめた。

「勝手にさわんじゃねえよ！　泥棒シスターかよ！」冷から携帯電

話を奪い返す。「かちかち、じゃねえよ！」

冷に対しての翔の口調は、ジェシカに対しての優しい、したっぱ口調ではなく、鋭い、というよりは、勢いだけでものを言っているように思えた。

「いけませんね。隠し事は」冷は慣れているようで、口調の変化には触れない。「神は全てを見透かします」

聖書を両手を使って慣れない手付きで開き、適当なページで止める。その動作に特に意味はないことは、今や誰もが知っている。

「主は怒っておられます。あなたは、嘘をつきました。謝るべきです」

「キリストはメールやんねえよ！」

「ああ、神よ。愚かな彼をお許しください」

「神様はお前のためだけには絶対になにもしないね！」

勢いだけで気の利かない物言いの翔と、出来の悪いシスターとの会話は、滑稽だった。翔の周囲の席の生徒は、静かに笑う。

翔は、冷が目を瞑ったのを見計らって、席を立ち、廊下へ出た。とりあえず、トイレの個室に駆け込む。

和式の便器にモノが残されているのを見つけると、すぐに個室から出て、トイレをあとにする。

宛もなく、とりあえず廊下をうろうろする。

ジェシカにかずさのことがバレたら何がまずいのか、考えてみる。

特にない。

一番バレてはまずいのは、やはり、遠依だ。

遠依にバレた場合の事を想像してみようと、集中する。

暴れ、喚き散らすか、ただ大泣きするか、自殺してしまうか、様々な最悪な場面が浮かぶ。

いつもは大人しい遠依が、ジェシカの言葉で一回、感情を抑えられず、キレたことを思い出す。マグカップや皿をジェシカに投げつけ、怪我を負わせた。

それだけでは済まず、この世の終わりかと思うくらい、大泣きした。

翔は、大きな溜め息を吐く。

第8話　遠依ってああいうヤツだから（後書き）

～雑談～

香織（後期）「ねえアスカ。メガネの話なんだけど」

アスカ（後期）「え！」

香織（後期）「実際、あたしがあげたメガネ、どうしたの？」

アスカ（後期）「それは、その……」

香織（後期）「まさか、壊してないよね？」

アスカ（後期）「えーっと……」

香織（後期）「口調が昔みたいになってるよ？」

アスカ（後期）「ごめん香織ちゃん！」

香織（後期）「じゃあやっぱり！」

アスカ（後期）「壊しちゃったんだ。破片なら、昔居た施設に……」

ジェシカ「結局、何の会話？」

翔「メガネ屋のＣＭじゃないんスか？」

ジェシカ「ああ！　納得！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4814z/

ヤンデレ少女でドン！

2011年12月20日18時49分発行